



カウンセリングルームだより

Vol. 23 (2009年10月発行)



秋も深まって来ました。私は少しひんやりした空気のこの季節が一番好きです。汗を気にせずオシャレが楽しめますし、なんとなく凜とした気持ちになれるような気がします。そして、食欲の秋、読書の秋。電車の中や、休日は家で、眠る前のベッドの中で、お気に入りの喫茶店でお茶しながら、読書タイムは至福のひと時です。

そこで今回は、最近気になった本で、跡継ぎや代理母を題材にした小説、生殖医療や移植医療の先端医療の生命科学が犯す罪を描いたミステリー、医療倫理、性をめぐるモラルの問題にせまり、「無関心はとてつもない恥になり、ついには罪になる」という登場人物が残した言葉を胸に刻んで、医療や人間、性について考える機会になればと、ご紹介したいと思います。



『子盗り』 海月 ルイ著 文春文庫

望んでも産めない女、子どもを奪われた女、母親になれないのに執着する女。三人の女達の情念が交錯する傑作サスペンス。(帯より) サントリーミステリー大賞受賞作



『聖母』(ホストマザー) 仙川 環著 徳間書店

子宮をなくした子どもを望む女性と、代理母になると意気込む実母、戸惑う父親と夫、代理母を半強制される義理の妹。事実を受け入れてあきらめても、揺れ動く心境やそれぞれの心理が描かれている。

『ジーンワルツ』 海堂 尊著 新潮社

産婦人科学や代理母出産を題材にした医療ミステリー。どこまでが医療で、どこまでが人間に許される行為なのか。作中の背景で、妊婦の術中死により産科医が逮捕された事件を模したものが描かれている。医師であり、医療を題材にしたテーマが多い著者だが、人工授精と体外受精を取り違えているのが残念。医療者であってもこの分野は認識がまだまだ薄いのが現実のよう。

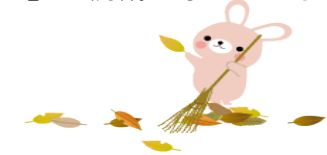
「チームバチスタの栄光」「ジェネラル・ルーシュの凱旋」でおなじみの著者。ちなみにあの「白鳥さん」は出てきません。

『エンブリオ』 帯木 蓬生(ははきぎ ほうせい)著 集英社
エンブリオ…それは受精後八週までの胎児。法の盲点をつき、倫理を無視した試み、最先端医療はどこへ向かうのか。生命の尊厳を揺るがす長編小説。



『インターセックス』 帯木 蓬生著 集英社

男か女か。生殖器などからは性別の判断が難しい「インターセックス」という問題を抱えた人がいることを知っているのでしょうか。日本でも毎年千人弱は誕生しているという。医療とデリケートな当事者達の心を織り交ぜたミステリー。「エンブリオ」の続編になっています。



10月・11月のカウンセリング予定日

10月2日(金曜日)、3日(土曜日)、16日(金曜日)、17日(土曜日)

27日(火曜日) 不妊学級、30日(金曜日)、31日(土曜日)

11月6日(金曜日)、7日(土曜日)、20日(金曜日)、21日(土曜日) 不妊学級